

前回までのあらすじ

依然としてオオミヤ・シティで猛威を振るう（ルイン）。

外からは襲来する大量の（ブレケース）。

そんなタイミングで惑星ゼーナに帰還したファフロウ姉妹の次女・タオエンからの情報を『受信』した者達は、それを最後の希望とし、それぞれの場所で、各々が自分の出来る事で終わる世界に抗っていた。

駆けつけたカナコ・T・シングウジとクラウ・P・ブラン、そしてアヤカ・シユバイツアーに（ルイン）を任せ、流速やみひめは負傷したツバキ・タカチホと共に戦場を離脱する。

その先で合流したのは機獣である（ヤミヒメ）と、その搭乗者の橘アサト。三人は再会を喜びつつ、タオエンから齎された作戦を実行しようとするが、紅い髪の少女・紅桜の指示で当初の予定を若干変更する。

本来はやみひめ一人で入るはずだった（ヤミヒメ）のコア・ルーム——コアが収められた空間——にツバキが共に入ると、仮想空間で二人を迎えたのは人間の娘の姿を採ったヤミヒメだった。

言葉を交わすやみひめとヤミヒメ、そしてツバキの三人。

それは本当の終わりの始まりでもあった。

※登場人物紹介は[こちら](#)

ゾイカルやみひめ -結-

オオミヤ・シテイの地下から現れた超巨大機獣（ルイン）。

目覚めさせたであろうサクヤヒメに使役されていた頃と違い、今は明らかに意思を持ち、自己の判断で行動しているように感じられる。

骨を思わせる灰色のテイラノサウルス型大型機獣を捕食した（ルイン）は変質し、主であるはずのサクヤヒメに致命傷を与え、街の破壊を続けているのだ。目的は判らないが、破壊そのものが目的だとしてもおかしくはない。

機獣とは強い闘争本能と破壊衝動を備えた生き物なのだから。

衛星軌道に到達した『輪』を介した荷電粒子砲の威力も、すでに目の当たりにしている。本当に破壊そのものが目的であるなら、此处で食い止めなければ、被害は世界規模になる。

それは彼女の望むところではない。

「——これならどうよ！」

修道女のようなMBジャケットを纏った（機獣少女）——アヤカ・シユバイツァーが、自身の身長を超す長砲身のキャノン砲を腰のために撃つ。直後に発火炎が発生するが、これは火薬の代わりに使用した機力が、光に変換された結果である。

発射による反動と、空気を震わせる轟音に耐え、射出された弾丸を見送る。威力重視のマグナム弾が空気を切り裂きながら目標に直進——命中する。（ルイン）の巨体に対し、着弾による見た目の損傷は皆無だが、衝撃は確実に届いているはずだ。瓦礫が散乱する地上を移動しながら、更に二発、同じ場所に撃ち込む。人間のように脳震盪を起こす事はないだろうが、頭部に近い顎には感知器などの重要な機器が集中しているはずなので、闇雲に攻撃するよりは良いだろう。実際、僅かに（ルイン）の動きが鈍った。

その隙を突くように、上空から羽根を広げた黒い悪魔が舞い降りる。

美しい娘だ。アヤカでなくても女神かと思紛う容姿だが、敵対する者にとっては死の女神に見えるだろう。

クラウ・P・ブラン。

そのMBジャケットは普通の（機獣少女）のそれとは一線を画し、戦うために造られた装備である事が伝わってくる。

クラウは急降下しつつ、両腕からビームを続けざまに発射。次に右腕の盾から半透明の紫色の三本の鉤爪を生成し、（ルイン）の脳天に突き刺そうとした瞬間——

「——嘘っ!？」

アヤカが驚愕するのも無理はない。その巨体からは想像もつかない速さで、（ルイン）はその身をぐるりと翻し、直上から高速で迫るクラウを迎撃したのだ。真横からの長い

尻尾しっぽによる強烈な一撃を浴びたクラウは、デパートの壁面に叩きつけられた。

生身であれば最初の一撃で挽肉ミンチ。MBジャケットを装備していても、壁に叩きつけられた瞬間に内臓破裂と全身粉碎骨折で即死だろう。

しかし――

「上手い……!」

〈ルイン〉の背後に現れたクラウを、アヤカはそう評した。

クラウは壁面ではなく、意図的に窓に突っ込み、そのままデパート内を移動し、別の窓から脱出したのだ。あの一瞬でその判断をしたのであれば、恐るべき戦闘感覚センスだ。

彼女とは初対面だが、連携もすでに取れている。こちらの援護の意図を理解し、期待通りの動きをしてくれる。頭がいいのだろう。

「美人さんで頭も良いとか、なにそれ最高!」

などとアヤカが別の意味でデモンションを上げているとも知らず、クラウは正面に光球を生成し――咆哮ほうこうを上げた。

――ッ!

鳴音ハウリングのような言葉にしづらい叫びが引鉄トリガーだった。クラウの放った大玉転がしで使うようなサイズの光弾は、白と紫が入り混じってうねり、バチバチと雷光まじを纏わりつかせ、〈ルイン〉の背中を直撃した。本当なら荷電粒子供給フアン口がある首元を狙いたところだが、確実に命中させる方を選んだのだろう。

――グウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ……!?

初めて〈ルイン〉が苦しむような反応を見せた。効いている。アヤカ達の目的は時間稼ぎと、被害を抑えるための足止めだが、ここは畳みかけるべきだろう。

反動制御のために最大稼働状態だった推進装置を休ませ、地上に降りたクラウから後を引き継ぐように飛び出した彼女もまた、アヤカと同じ考えだったらしい。

カナコ・T・シングウジ。

目を覆おおう面バイサーで表情を隠し、意志疎通コミュニケーションも取りたがらないが、協力する気はあるらしく、こうして動きは合わせてくれていた。

カナコがカタナ型のMBデバイスを大上段に構え、振り下ろす。その際、カタナの刀身が何十倍にも巨大化した。実際には機力で生成した長大な刃やいばがそう見えているだけなの

だが、もちろんハリボテであるはずもない。クラウの光弾が直撃したのと同じ場所に振り下ろされたカナコの一撃に、ヘルインは再び苦悶の声を上げた。押している——誰もがそう感じたはずだ。

だが、それも束の間。ヘルインは先ほども見せた、全身からの紫色に変わった荷電粒子砲の拡散放射で弾幕を張り、それが晴れた時には背中中のダメージは修復されていた。

「……ジリ貧ね——」

アヤカはキャノン砲を分解・再構築し、多連装ロケット弾発射機を構える。やはり下手に色気を出さず、時間稼ぎに徹するしかない。

希望はすでに託したのだから。



その空間は闇に閉ざされていた。

外界からの光は遮断されているのか、あるいは外界など存在しないのかもしれない。なぜなら此処は仮想空間であり、必要のないものは存在しない世界なのだから。

そんな無限の闇の中、スポットライトに照らされた人影が三つある。

一人は流遠やみひめ。地球から来た小学六年生の、特異な能力を秘めた〈機獣少女〉。

もう一人はツバキ・タカチホ。惑星ゼヘナで生まれ育った小学五年生の、優秀ではあるが、ごく普通の〈機獣少女〉。

最後の一人はカグツチ。本来の姿はオオカミ型の機獣であり、名前は〈ヤミヒメ〉だが、今の彼女はツバキのMBデバイスとして在る事を選んだ。

そんな彼女等の前には数台のモニターが置かれていた。

どのように固定されているのか、モニターは彼女等の目線の高さに浮いており、見えな誰かが直立不動で支えているかのようで、対峙していると不気味ですらある。すべてのモニターには『SOUND ONLY』の文字だけで、何も映像は表示されていないのが、より不気味さを増していた。

人間——一人は人外だが——とモニターが向かい合っているので当然かもしれないが、和気藹々とした雰囲気ではない。むしろ陰悪でこそないものの、重苦しい空気ではある。

「本当にもう、人間を嫌いになっちゃったの……?」

やみひめの悲しげな問いに、数台あるモニターからの返答は一つもなかった。

第四十六話

世界の始まりの日（前編）

空中に浮かぶ 夥^{おびただ}しい数の騎兵銃^{カービン}、小銃^{ライフル}、そしてミサイル・ポッド。それらが指揮官の統制^{もと}の下、最適なタイミングと選択によって威力を發揮^{はたら}していく。

光や爆発が生まれる度に、敵といえ命が失われていく。

だが、それは指揮官たるベアトリーチェ・ファフロウの関知するところではないらしい。

「あはっ☆ こつちのフォーメーションの方が効率が良いかも！」

攻撃のローテーションや弾頭の変更など、様々なパターンを試していたベアトリーチェは、久々の制限解除ですっかりテンションがハイになっているようだ。

そんな傍^{はた}から見れば危険人物認定されかねない様子の妹を、タオエン・ファフロウは嘆息^{たんそく}しつつ眺^{なが}めていた。

オオミヤ・シテイ外縁——南部方面

『ブレケース』の群れを迎撃するため出てきた二人は、三つ目の群れを殲滅^{せんめつ}している最中だった。

もつとも、働いているのは妹のベアトリーチェのみだが。

「姉さん、そちらの状況はどうですか？」

「——つくく……」

北東方面を担当している姉、ヤミヒメ・ファフロウに通信を送ると、なにやら低い笑い声が聞こえた。

「姉さん？ 聞こえていますか？」

『ちょうど愉^{たの}しんでいるところだ。邪魔をするな——殺すぞ？ ふっ、ふははは……ッ！』
そう言っ、一方的に通信は切られた。姉もかなりハイになっているようだ。

「……ふう。まともなのが次女の私だけとは、嘆^{なげ}かわしい限りです」

長女も末っ子も普段は至ってまともなのだが、ある種のスイッチが入ってしまうと、途端^{とたん}にヤバい奴になってしまう。

「もつとも——ヤバい時の二人も、それはそれで可愛いのですが……ふう」

目の前で活き活きと大火力を扱うベアトリーチェと、離れた場所で戦いに酔っているであろうヤミヒメを想い、タオエンは微^{かす}かに頬^{ほお}を上気させるのだった。



オオミヤ・シテイ外縁——北西方面

無数の『ブレケース』と百人に満たない『機獣少女』の攻防は、際どい均衡^{きんこう}を保^{たも}っていた。

(覚悟はしてたけど、これは厳しい——)

空になった弾倉マガジンを背後に放り投げ、新しいものと交換。棹コウケン 桿グレバーを操作し、薬室チャンバーに弾を送る。一連の作業を機械的にこなしつつ、バニラ・イカルガはそう感じていた。

視界を覆う頭部の複合ユニットと、左肩の広範囲リーダー・ユニット、それらと同期させた大型電磁狙撃銃〈サンダー・ボルト〉を腹這はいに構え——撃つ。

仕留めたかどうかの確認はせず、ひたすら照準器スコープで次の標的ターゲットを見つけては撃っていく。少しでも早く、少しでも多くの敵を撃てば、それだけ前線の味方の負担を減らせる。

狙撃手スナイパーというのは敵からすれば厄介やっかいなもので、存在するだけで威圧感プレッシャーを与えられる。もつとも、昆虫と爬虫類と軟体動物を掛け合わせたような生き物である〈プレケース〉に、

狙撃される恐怖を理解出来るかは疑問だが。

「……つち」

リーダーが混戦を抜けて接近する〈プレケース〉を捉とえた。バニラは舌打ちすると、左手でハンドガンつかを掴み、一瞬で照準——からの三点射スリー・バースト。普通なら抜き撃ちで当てられるような距離ではないが、彼女にとっては造作もない。

機力ではない実弾を浴びて頼たよれた敵を一瞥いちめつし、ハンドガンを置き、狙撃に戻る。

同僚のライカ・ユズキとアエラ・カートライトを援護しつつ、可能な範囲で他の〈機獣少女〉の動きにも気を配る。これも後方に位置する狙撃手スナイパーの仕事ではあるのだが、バニラ一人では到底カバーしきれない。

仕方のない事ではある。〈機獣少女〉の在り方あからすれば、飛び道具——それも長射程ロング・レンジ——を持つている方が珍しいのだから。

「——バニラ姉様！ 〈ベリル・ランス〉を貸してください！」

後退してきたアエラが言った。サブマシンガンは使い切ってしまったらしい。両肩のバトルカノン砲と散弾迫撃砲は、この混戦では使いものにならない。そもそも彼女の〈フェンサー〉は、特殊な状況を想定したMBジャケットなのだ。

「それより〈ライジン〉を持って右翼に回ってください。このままだと戦線が維持出来できなくなる」

そう言ってバニラは、背後の『武器見本市』から、電磁投射砲を選んだ。可能な限り持ち込んだ武装の山だったが、すでに在庫は半分以下にまで減っている。

「〈ライジン〉を……了解です！」

大型狙撃銃〈ライジン〉。

本来はライカの装備だが、実質的にバニラ専用になりつつあった。その事を理解しているためか、やや戸惑っていたようだが、そんな場合ではないと判断し、アエラは指示に従

った。

背面の主推進装置を利用した跳躍で一気に距離を稼ぎ、前線に戻っていくアエラを見送ると、バニラは狙撃を再開した。

異形の〈機獣少女〉が頭上を通過していくのを意識の端で捉える。〈フエンサー〉という、対大型〈カタストロ〉用に開発されたMBジャケットらしく、見た目も武装も規格外だ。

(あれでも〈ルイン〉を落とせなかったのね……)

赤と灰、両方のティラノサウルス型機獣と戦ったが、〈ルイン〉とは接触すらしていない。

大型のティラノサウルス型を超える超大型とは聞いているが、どれほどの脅威なのか……。

リツ・ミナトは銃型のMBデバイス〈シユーツエン〉を構えつつ、今も〈ルイン〉と戦っているであろう〈機獣少女〉達をふと想った。

(よそう。私が気にしても仕方ないわ)

雑念を捨て、正面の〈フレケース〉に踏み込む。槍の有効範囲を活かし、反撃がギリギリ届かない距離で敵の節足を切断し、すぐに離脱する。

直後――

「――でえええいッ!」

姿勢を崩した〈フレケース〉の頭上から、気合と共に槌矛が振り下ろされる。長い柄の先にあるのは、無数の突起を生やした長さ五十センチほどの五角柱の凶器――〈リーピン〉。手にしているのはリツの後輩であるモカ・カワイだ。

「滅せよ!」

重量と勢いで深々とめり込んだ〈リーピン〉の先端が、モカの発動言語に従い牙を剥く。脳天を裂かれ、胴体にまで及んだ〈フレケース〉の内側から、八方に青白い刃の花が咲いた。

頰れる〈フレケース〉と、軽々と得物を引き抜くモカ。

「やりましたね! リツ先輩!」

「……そうね」

少し前とは逆で、リツが牽制し、武器の特性もありモカがトドメを刺すという役割分担も、だいぶ馴染んできた。〈フレケース〉のグロテスクさも同じだ。

だが、モカのトドメで〈フレケース〉が絶命する光景だけは未だに慣れない。たださえまだ小学六年生と幼く、そんな彼女が凶器を振り回し、見るも無残な行為に及んでいる

のだ。

「この件が済んだら、せめて戦^{ハルバート}斧に戻すわよ」

モカのMBデバイス(リーピン)は、最初から槌^{メイス}矛だった訳ではない。まあ、凶器という意味では大差ないというか、武器である時点で見た目など意味がないかもしれないが。

「リツ先輩は、あまり好きじゃありませんか？」

「モカには似合わないわ」

というより、戦い自体が似合わない。そもそも向いていなかったのが、よくここまで戦えるようになったと思う。まだ関係が良くなかった——というか、一方的にリツがモカを相手にしていなかった頃が、遠い昔のように感じられる。

「——(オーディン)、ぶちころがすわよ！」

普通なら聞こえないような距離から、威勢の良い大^{だいおんじょう}音声^{おんじょう}が響いた。

主^{あるじ}の命^{めい}を受けたMBデバイスが応え、攻撃態勢に移行したのが遠目にも判る。ちなみに、なにかしら発しているであろうMBデバイスの機械^{マシン}音声^{ウオイス}は、当然だが届いていない。

ドレスと甲冑を組み合わせた姫騎士風のMBジャケットを纏^{まと}ったその(機獣少女)は

吶^{とっかん}喊^{かん}し、数体の(ブレケース)を宣言^{せいお}通り『ぶちころがし』——その先で孤立した。

「(グングニル)さん!!」

そう。その見事に(ブレケース)数体をぶちころがして敵陣で孤立したのは、(グングニル)ことキリエ・ソウマその人だった。

「……パイセン、本当に馬鹿^{ばか}じゃないの——」

「た、助けないと……!」

「えー……」

「リツ先輩!?!」

本気だと思ったのか、モカがショックを受けたような顔をする。そんな目で見ないでほしい。

「冗^{じょうだん}談^{だん}よ」

この戦場で、誰彼構わず助けている余裕はない。だが、味方が倒ればその分、自分達がやられるのも早くなる。そうでなくとも、助けられるものならリツだって助けたいとは思っている。

本を買うためのバイト感覚で始めたとはいえ、それでも一応は(機獣少女)なのだから。

同じ意匠のチャイナドレスに身を包んだ二人は、世話の焼ける先輩を救助すべく、敵陣に向かった。

闇に閉ざされた空間にツバキはいた。

隣にはやみひめがいて、彼女を間に挟んでカグツチ——本来の名前ではないが、そう呼ぶ事を本人が希望した——も仮想人格である人間の娘の姿で存在している。

此処は仮想空間だが、カグツチの〈相刻の間〉ではない。すべての機獣が持つ己の仮想空間を繋いだ状態にした、機獣同士が集う会場のようなものだという。

しかし、現在の惑星ゼヘナに機獣は存在しない。そのほとんどが機体を破棄され、コアのみの状態で休眠施設に保管されているか、〈ジェネレーター〉の動力として使用されているかの、どちらかである。

つまりこの場にいるのは、自分達を除けば〈ジェネレーター〉に組み込まれている機獣という事になる。

そう。ツバキ達は今、世界中に存在する〈ジェネレーター〉施設内の機獣——そのコアと対面していた。

こうなつた経緯を語るには、少しだけ時間を遡る必要がある。もともと、仮想空間内における時間の流れは現実と違うため、あくまで体感時間での話だが。

〈カグツチ〉の本来の姿であり本体である機獣——〈ヤミヒメ〉。そのコアが収められた空間に、ツバキはやみひめ——機獣でなく人間の方の——と共に入り、気付けば仮想空間である〈相刻の間〉に招かれていた。人間の娘の姿をしたカグツチと再会を果たし、彼女とやみひめが並行世界における同一存在だと知つたのは衝撃的だったが、話はこれで終わりではない。むしろ、ここからが本題だった。

「そんな事が……」

やみひめから聞いた、〈ヘルイン〉の無差別攻撃によってツバキが意識を失っていた際の出来事を要約するところだ。

〈ステインガー〉の封印施設の調査に向かい消息不明となっていたベアトリーチェとタオエンが戻り、ある種の精神感応で膨大な情報を『送信』してきた。それを『受信』した者達が、今こうして行動に移しているのだという。

「では、まずは〈ジェネレーター〉共の説得だな」

ツバキが状況を整理していると、カグツチがなにやら行動を起こした。特に何をした訳でもない。呪文を呟いたのでもなければ、何か操作した訳でもない。だが次の瞬間、周

囲は和室から何も見えない暗室へと変わっていた。頭上からスポットライトで照らされているが、見上げても照明器具らしきものは見えず、何がどうやって光を照らしているのか判らない。

「え!? どうなったの……!?」

「落ち着け。仮想空間同士を繋いだだけだ」

驚くやみひめとは対照的に、カグツチは落ち着き払っている。この二人、容姿は年の離れた姉妹であるかの如く似かよっているが、性格はやはりまるで違う。

ツバキが、ふとそんな事を思っていると――

「さて――状況は理解しているな、同胞達」

カグツチがやや声の調子トーンを変えて言った。

彼女の視線の先には数台のモニターがあり、空間に固定されているかのように浮いている。映像はなく、ただ『SOUND ONLY』と表示されているだけだ。

……………

呼びかけに対する返事はない。

「姿も見せず、返事もないとは……嘆かわしい限りだな。シエネレーター」に組み込まれた事で、誇りすら失ったと見える」

カグツチの挑発的な物言いにも、モニター――彼女の言葉から察するに、あれらはシエネレーター」に組み込まれた機獣なのだろう――は、誰一人として答えない。

「っ！ いい加減に――」

「カグツチ、待つて」

耐えかねたカグツチを、やみひめが止めた。そうだ、ここで争っては意味がない。カグツチ自身が言ったように、目的は説得なのだから。

事の発端はシエネレーター――その内部に組み込まれた機獣のコアの絶望だ。絶望に惹かれて「ブ레이크」が現れ、その『搦め手』によって「ステインガー」の封印が解かれ、今に至っている。

そして、ヘルインの変質による強化と、「ブ레이크」の群れの大量発生もまた、「シエネレーター」の存在が関わっているとタオエンは判断した。ヘルインを変質させた者が、内部で眠るハイデマリーを介して『回線』を開き、「シエネレーター」のコアから直接、エネルギーを供給していると考えたのだ。その影響でコアは弱まり、より深い絶望へと沈み、更に「ブ레이크」が発生したのだと。

だからまず、「シエネレーター」のコアと接触し、ヘルインへのエネルギー供給を絶つ必要がある。そのためにツバキ達は来たのだ。

「えっと……私、やみひめ。お話し、聞いてくれないかな」

やみひめが改めて会話の口火を切った。姿の見えない相手に対し、やや不安そうな口調になっているが、それは致し方ない。

『……………やみひめとやら、私が代表して聞こう』

かなりの間を置き、初めてモニター側から声が上がった。表示は『SOUND ONLY』のまま、音声もスピーカーから出力されている。返事を躊躇^{ためら}っていたというより、代表者を決めていたのかもしれない。

東方大陸だけでも約六百基の〈シネレーター〉が存在し、全大陸を合わせれば三千基を超える。設置されたモニターの数は十台に満たないが、姿が見えないだけで、そのすべてがこの仮想空間での対話を見ているはずなのだ。そう思うと、一気に緊張感が増してくる。

「！ ありがとう！」

「……………おい。なぜ、私の言葉は聞かず、やみひめには答えるのだ？」

笑顔の花を咲かせるやみひめとは対照的に、納得がいかない様子のカグツチは低い声で言った。

『……………』

「まただんまりか……………っ!!」

「か、カグツチ！」

「落ち着いてください！」

モニターに歩み寄り、画面を叩き割らん勢いのカグツチを、やみひめとツバキは左右から押さえ、元の位置まで連れ戻す。

しかし妙だ。カグツチを無視しているというより、恐れているような雰囲気をつバキは感じた。何も映っていない機械のはずだが、この仮想空間における一種の分身^{アバター}であるなら、そういう気配のようなものがあってもおかしくはない。そして、それはその背後にいるであろう多くのコアからも感じていた。

『……………無礼を詫^わびよう。我々はあなたに委縮していたのだ——〈キョウシユウキ〉よ』

やはり、そういう事だったらいい。コアの代表者はカグツチを聞き馴染みのない名前で呼んだが、このように恐れられるだけあって、特別な過去がある機獣だったのだろう。

ツバキは妙に納得していたが、コアの代表者の言葉では、カグツチの溜^{りゅういん}飲は下がらなかったようだ。

「ぬう……………だったら、そう言えばよかろう！」

「怖い人に向かって、『怖いです』なんて言えないよ」

「そうですよ。機嫌を直してください、ね？」

「……ふん。まあよい」

ツバキにお願いされると弱いのか、カグツチはやや不貞腐れた様子で引き下がった。

そうして、なんとかカグツチを宥め、話を本題に移すに至っていた。

〈ジェネレーター〉のコアとの対話の目的、それは〈ルイン〉へのエネルギー供給をやめてもらう事だ。

『……それは出来ない』

「どうして!？」

ツバキも、恐らくはカグツチもやみひめと同じ気持ちだった。人々の脅威となっている〈ルイン〉に助力する以上、何か事情があるはずだ。

『……………』

しかし、〈ジェネレーター〉のコア——その代表者はまた口を閉ざした。

「本当にもう、人間を嫌いになっちゃったの……?」

実際の所 ツバキとやみひめには心当たりがあった。地球でクラウの願いを歪んだ形で叶えようとした〈カタストロ〉と対話した際、二人は〈ジェネレーター〉の『消滅現象』と、〈カタストロ〉が出現する理由について知った。

曰く〈ジェネレーター〉に組み込まれたコアは自壊プログラムである『アポトーシス』を失い、自らの意思で死を迎える事が出来なくなる。機獣のコアに寿命はなく、破壊などの外的要因を除けば、無限に生き続ける事が出来るらしい。だが、あまりに長い時間を過ごす、生きる事に飽きてしまうのだろう。

あるいは、搭乗者を失った機獣が共に逝きたいと願う事もあったかもしれない。

無限の倦怠、または悲しみから解放されるための手段。

それを奪われたコアの『終わらせてほしい』という『希望』が〈カタストロ〉を呼び、最初で最後の『消滅現象』が起きた。

これが〈ジェネレーター〉と〈カタストロ〉の真実であり、〈機獣少女システム〉が開発されるきっかけでもある。

もちろん、対話をした〈カタストロ〉の話が嘘である可能性はある。だが、その〈カタストロ〉は、上層部——それが行政機関なのか〈機獣少女協会〉なのかは不明だが——は真実に気付いているだろうと言っていた。

そしてなにより、ツバキ自身が嘘だと思えなかった。だから今日に至るまで、この件は

何処にも報告せず柵上げにしてきた。もつとも、惑星ゼヘナに帰還してから慌ただしく、そんな余裕もなかったのだが。

「ツバキ・タカチホと申します。私からも、お聞きしたい事があります」

このままでは埒が明かないため、質問を変えてみる事にした。まずは情報の真偽を確認する。

『……何か』

対話の意思はあるらしく、コアの代表者が答えた。スピーカーを通した声の口調は相変わらず重く、陰気というよりは疲れているような印象を受ける。

「〈シネレーター〉に組み込まれると、あなた方の『アポトーシス』が失われるというのは本当ですか？」

「な……っ」

カグツチが驚いた気配を背後から感じた。

(そうか。この話をした時のカグツチは、やみひめさんが再起動した疑似人格だったから、今のカグツチには初耳なんだ)

内心で納得しつつ、今は説明するべきタイミングでもないため、カグツチには申し訳ないが気付かなかった事にさせてもらう。

『肯定する。何時の頃からかは定かではないがな』

それは〈シネレーター〉建造初期は違ったという事か。つまり、最初から機獣の尊厳を踏みにじっていた訳ではないと。

「では、もうひとつ——」

この質問は許されるのだろうか。兵器として必要とされなくなっても、共に在りたいと願ってくれた彼等を裏切った同じ人間が、これを訊ねるのはあまりに無神経だと思っ。

それでも——

「終わらせてほしいと……死なせてほしいと願った事がありますか？」

「ツバキ……」

情報を共有しているやみひめが、気遣うような眼差しを向け、ツバキの手をそっと握ってくれる。たった一人でも味方がいてくれるというのが、こんなにも心強いものか。

『……今も願っている』

想定していた答えではある。それでも否定してほしかったというのは、こちらの身勝手だ。

「そうですか……」

これであの〈カタストロ〉の言葉が証明された。上層部の人間が知っていたかどうかは

問題ではない。事の始まりである（カタストロ）の出現も、（ブレケース）の襲来に端を発する一連の事件も、すべては（シエネレーター）に組み込まれた機獣の尊厳を踏みにじった人間の自業自得だったのだ。

この期に及んで、どう言い訳をする。許してくれと懇願すれば聞き入れてくれるのか。いつそ人間は滅びを受け入れるべきではないのか。それが償いなのではないか。

ネガティブな思考がツバキの心を蝕んでいく。事実確認をする事で打開策を見出せるのではないかと斬り込んでみたが、結果は返り討ちにされたも同然だった。

「——ツバキ！」

「っ！……やみひめさん？」

一瞬、意識を失いそうになっていた。やみひめの呼びかけがなければ、危なかったかもしれない。

「しっかりして！ 此処、なんだか嫌な感じがする！」

「ふむ。確かに、悪意のようなものが濃くなってきているな」

やみひめとカグツチは何か異変に気付いたらしい。

「回りくどいのはやめだ。今すぐに（ルイン）——あの古代種へのエネルギー供給をやめよ」

『……それは出来ないと言った』

「間違えるな。私はやめろと言ったのだ。頼んでいるのではない」

カグツチは声を荒げていない。だが、怒りを押し殺したような抑えた口調からは、より凄味を感じさせる。

『……………』

「どうした？ 従わぬのであれば、現実で貴様等の本体を破壊するまでだぞ」

カグツチの言っている事は明らかに現実的ではない。だが、ただの脅しでない事は嫌というほど伝わってくる。本気だ。出来るかどうかではない。

「——恫喝はそのくらいにしておけ、（キョウシュウキ）」

唐突に聞こえた声は、陰悪を通り越し殺伐とした空気が流れる中、まるで気にせず落ち着き払っていた。その人物は光源の見えないスポットライトを頭上から浴び、気付いた時にはツバキ達とモニター側で三角形を形成する位置に立ち、カグツチに向けてやれやれといった表情を浮かべている。

前をまつすぐに切りそろえた、古風というか、ある種の風格を感じさせる長い黒髪。す

べてを見通すかのような紫眼しがいんを持ち、見様みようによって少女にも大人の女性にも見える。

「あの人……」

「アニスさん……？」

普段はロゼット・ユダールの秘書のような立場だが、その正体は〈ステインガー〉より遙はるかに以前から人間の姿となっていた古代種。〈ヒナミ総力戦〉でクラウドを庇かばい致命傷を負ったため、現在は意識不明の状態だと聞いていたが。

「貴様、〈アニマウルペス〉か」

「今はアニスと呼ばれている」

「ならば私も、今はただのカグツチだ」

「……そうか。そうだったな」

カグツチとアニスの間に独特の空気が流れる。二人は面識があるようだ。

〈キョウシユウキ〉という言葉をもた聞いたが、カグツチの『二つ名』か何かだろうか。

「コアの代表者よ。間もなく汝等なんじらの枷かせが解かれる」

再会あいさつの挨拶——と言つていいかは微妙だが——を終え、アニスはモニター側に向かつて言った。

「改めて考えてほしい。本当に人間が減んでも構わないのか」

『……………』

「かたちは変われども、彼女等のように、今も機獣と人間は共に在ある。MBデバイスと、その使い手として、共に戦っている」

アニスが視線でツバキ達がそうだと示す。

「それが汝等という犠牲の上に成り立っているのは事実だ。しかし、この一件で確実に状況は変わるだろう」

多大な犠牲と被害が出た。この戦いが終わった時、真実を知る者が上層部に残っていれば、〈シネレーター〉を今のまま運用し続ける事はしないだろう。

もし残っていないとすれば、その時は——



現実のオオミヤ・シティ中心部では、カナコ達と〈ルイン〉の戦いが続いていた。

経過時間はせいぜい十分。だが、これまでの人生でもっとも長く過酷な十分だった。

カナコとクラウドが地上と上空から波状攻撃を行い、アヤカが〈機獣少女〉らしからぬ武装で援護する。〈ルイン〉との圧倒的なサイズ差を逆手に取った作戦だ。

「……………」

カナコでなくとも言葉を失うだろう。何もない空間から、明らかに無機物で構成された多関節の平たい尻尾が生え、荷電粒子砲を撃つ瞬間の（ルイン）の頭部を強打したのだ。更に背後からも巨大な機械の鉄が出現し、（ルイン）の背中を深々と突き刺した。その尻尾も鉄もカナコは見覚えがある。

「——危なかったのう。グッドタイミングというやつじゃったろ？」

「……………ええ。まっただわ」

振り返ると、予想通りの人物が立っていた。ぞろつとした十二単のような衣装に身を包んだ、黒髪赤瞳の妙齢の美女——サクヤヒメだ。

変質した（ルイン）に背中から串刺しにされ——先の攻撃はその意趣返しだろう——ゼンジン病院に一人残った人外の存在。

「まさかとは思うけど、最高のタイミングを見計らっていた訳じゃないわよね？」

カナコが薄く笑みを浮かべて言った。ちなみに瞳はまるで笑っていない。

彼女の言う通り、確かにタイミングが良すぎる。創作であれば、ここで助けに入れば最高に盛り上がる場面だろう。

「なんじゃ。野暮な事を訊くでないわ——演出じゃよ」

まさかの凶星だったようだが、悪びれた様子はまるでない。むしろ得意げですらある。

「……………はあ。別にいいけど」

嘆息し、続ける。

「一応訊くけど、なにしに来たの」

「彼奴に借りを返しにな」

「……………ハイデマリーを救いにじゃ。これで満足かの？」

神話の時代——遙か以前の惑星ゼヘナで起きた世界改編の幻影は、波動のようなものを感じた際にカナコも幻視した。あの時のリベンジをする気になったという事か。

「そう。どうでもいいけど」

「訊いておいて随分な言いようじゃの……………」

強大な力を持つ人外の存在だが、不思議とカナコはサクヤヒメに対し恐怖や嫌悪を感じない。むしろ親近感のようなものを覚えていた。

「けど、助けてくれた事には礼を言っておくわ。ありがとう」

「感謝してくれるのなら、ひとつ頼みがある」

そう言つてサクヤヒメは、カナコの左腕——そこに装備された（ヤタノカガミ）を指し

た。

「その力で彼奴の——正確には、彼奴を変質させた者の悪意を払ってほしいのじゃ」

「これはただの盾で、そんな機能は——」

「あるのじゃよ。お主に力を与えたのが誰か、忘れたとは言わせんぞ」

サクヤヒメはそう言い、不敵な笑みを浮かべた。



世界中の〈シエネレーター〉のコアと繋がった状態になっている仮想空間。

アニスが説得に加わり、少しだけ流れに変化が起きていた。

そんな時——不意に、ツバキの脳裏に光が照らすようなイメージが浮かんだ。

「——あつ……」

唐突に身体が軽くなった気がした。物理的にとりより、気分の問題かもしれない。正体不明の不安感があつて、取り除かれて初めてそんなものがあつたと気付いたような。

「ツバキ？」

「なんだか、急に気持ちが悪くなったような気がします」

「そういえば、嫌な感じが消えてる……」

やみひめも思い当たる節があるようだ。

「ふむ。『外』で何かあつたようだな」

「外って、現実？」

「そうだ。枷が解かれるとか言っていたが、それに関係があるのかもしれない」

アニスの言っていた言葉だが、カグツチも意味は判っていないようだ。それでも、これは好機なのだとツバキは感じた。

「——聞いてください！」

自分で思っていたより大きな声が出てしまった。ネガティブな思考も今は働かなくなっている。先の光のイメージの影響だろうか。

「……人間があなた方にした事は許される事ではありません」

声の音量を調整し、普段より少し大きめで話す。

「この戦いを終わらせられたら、私が真実を公表し、あなた方の希望に沿えるよう尽力します。だから、償う機会を私達にいただけませんか」

「この娘であれば不義理はしないだろう。我も手を貸す事を保証する」

ツバキの提案にアニスが続けてくれた。彼女は立場上、表舞台には立たないようにして

いると思っていたので、少し意外だったが、こんなに心強い味方はいないだろう。

「私も手伝うよ!」

「やみひめさんは橘さん達と地球に帰らなくていいんですか?」

「あ、そっか……でも、うん……」

苦笑気味に言うと、やみひめは本気で悩み始めたらしく、それがツバキには嬉しかった。

「私はツバキのやる事に付き合っぞ。……戦場でしか役には立てんだろうがな」

「そんなことありません。カグツチがいてくれると心強いです」

彼女をただのMBデバイス——道具だと思つた事はない。こんなにも人間臭く、自分を気遣つてくれる存在を、そんな風に思えるはずがない。

「これは、汝等にとつても最後の機会となるだろう」

ツバキ達の様子にアニスほんの一瞬だけ相好を崩すと、〈シエネレーター〉のコアの分身であるモニター側に向き直り、言葉が続ける。

「彼女等を——人間をもう一度だけ信じるか。それとも、このまま見限るか。返答を求め」

『——信じよう』

「え……」

コアの代表者の言葉があまりに呆気なく、ツバキは幻聴か聞き間違いかと耳を疑つた。

「随分と掌を返すのが早いことだな」

「か、カグツチ……っ」

やみひめが窺めるが、カグツチの言い分も判る。アニスの口添えがあつたとはいえ、それでも呆気なさすぎはしないだろうか。

『誤解があるようなので訂正しておく。我々は『終わらせてほしい』と願いはしたが、人間を滅ぼしたいと思つた事はない。尊厳を奪われた事に対する怒りと悲しみはあるがな』

仕方のない事だと思ふ。それでも人間そのものに対する憎しみはないというのは意外だが、それはただ、人間が狭量なだけなのかもしれない。

『もうひとつ。〈ハメツノマジウ〉——人間が〈ルイン〉と呼ぶ古代種へのエネルギー供給

給だが、正確に言えば我々の意思でやめる事は出来ない』

「それはアニスさんの言っていた『枷』のせいですか?」

『肯定する。〈ルイン〉は強制的に〈シエネレーター〉からエネルギーを奪い、我々は枷によつて抗えなかつた。だが、今はそれが外れている。僅かな時間であれば、エネルギーの供給を遮断する事は可能だ』

その僅かな時間で〈ルイン〉と決着をつけられれば、この戦いを終わりに出来る。

言葉にせずとも表情だけで全員の意味確認は取れた。

「お願いします」

『了解した』

「ありがとう、信じてくれて……！」

『我々として、かつては人間と共に在った。在り続けたいと思ひ、〈ジェネレーター〉のコアになる事を選んだのだ。人間が滅ぶのは本意ではない』

やみひめの感謝の言葉に、コアの代表者はそう答えた。



オオミヤ・シテイ外縁——北西方面

押し寄せる〈ブレイクス〉と迎え撃つ〈機獣少女〉による混戦は続いていた。

何体倒したのか、何人やられたのか、把握している者はいないだろう。誰もがそんな余裕のない状況の中、前線で敵を倒しつつ、味方も護ろうと奮闘する鎧武者がいた。

ライカだ。

専用ライフル〈コクウ〉を右手で構え、目についたものから大口径弾を叩き込んでいく。

対物ライフル並の威力と貫通力を誇る特殊弾頭は強力で、一撃で相手を仕留められる。通常は機力を弾丸として撃ち出すのだが、今はロゼットが保管していた実弾が装填されていた。

（大昔はこんなもの使って戦争してたんだよね……）

あまりの威力に若干の恐怖を感じつつ、弾倉を交換。遊底を操作し、薬室に弾丸を送る。

「伏せろ！」

近くで戦っていた味方に警告を發し、補充したばかりの特殊弾頭で援護する。一撃で仕留められなかったものもいたが、援護としては上出来だ。手を振って感謝を伝えてくる味方に応え、移動しつつ〈コクウ〉の再装填作業をこなす。威力が高い分、装弾数が少ないのが難点だ。

「——まずいっ！」

〈ブレイクス〉の触手で締めあげられている〈機獣少女〉を視界に捉えた。反射的に〈コクウ〉を構えるが、急所を狙えば巻き込みかねない位置だ。ライカは得物を高々と放り投げ、腰に吊るしたカタナを抜き、加速する。

「おおお——ッ！」

一瞬で距離を詰め、〈ブレイクス〉を擦れ違ひざま袈袈斬りにし、続いて背後から斬り上

げ、最後に振り上げたカタナを払いトドメを刺す。

ライカの剣技・乱れ雪月花。

見た目の派手さと流れるような動きの美しさから、興行でやるとウケが良い。

「ははっ。実戦でも使えるもんだ……」

放り投げた〈コクウ〉が降ってくるのを見ないでキャッチ。血飛沫を撒き散らし絶命した〈プレケース〉を見下ろし、演技が染み付いた我が身に苦笑する。

「動けるか？」

「な、なんとか……」

巻き付いていた触手から解放された〈機獣少女〉は、ライカに礼を言うと、自力で後方へと下がっていった。

「……？」

改めて戦場を見渡すと、違和感を覚えた。心なしか、無数にいた〈プレケース〉の数が減り、動きも緩慢になっているように感じたのだ。

「……ここが勝負所かもな」

『〈レイジ・システム〉を起動しますか？』

ライカの呟きに、彼女の相棒であるMBデバイス〈雪月花〉が反応した。

「やってくれ」

『了解。〈此れより進むは修羅の道〉——』

「鬼に逢うては鬼を斬り。仏に逢えば仏を殺す——オフエンス・モード！」

音声認識によって起動コードが入力され、ライカの奥の手が安全装置解除される。

『武運を、ライカ』

「あいよっと！」

ライカの纏う淡藤色の装甲が、ぼんやりと赤く輝く。頭部には角のような光が生え、

その出で立ちは『鬼武者』といったところだろう。

〈レイジ・システム〉。

ライカが『オフエンス・モード』と呼ぶそれは、予め貯蔵された機力を瞬間的に開放し、基本スペックを引き上げるといふものだ。あくまで実験的なシステムであり、彼女が所属する〈FA::Gエンタテインメント〉の興行はもちろん、実戦でも使われる事はなかったが、それは古代種〈ステインガー〉が出現するまでの話となる。

キャッチした〈コクウ〉を背中 of 取付部に懸下し、空いた左手にカタナを持ち替え、右手で太刀を抜く。

「——っしや！」

「ブレケース」が最初に現れた時の事だ。まだモカとリツはただの事務所の後輩と先輩で、仲も良くなかった。それでもリツは、置いていけと言ったモカを見捨てなかった。

あの時は結果的にカナコとツバキに救われたが、二人はこの戦場にはいない。そして、この戦場にいるほとんどが自分達の事で手一杯で、誰かを助ける余裕がない。(だから、私がリツ先輩を護るんだ……っ)

気持ちで負けまいと内心で自分を奮い立たせる。

そこへ――

「――ひゃっ!？」

モカとリツを取り囲んでいた「ブレケース」の頭上に、時計回りの順で『槍』が次々と降り注いだ。それらは見た目に特徴はなく、しかし『槍』だと認識は出来る。

「――滅せよツ!!」
アニレライト

トレスロ アクティブイト・ウオイス

轟く発動言語によって刺さった『槍』が威力へと転化し、次々と「ブレケース」を内側から破壊していく。『槍』は機力によって生成されており、込められたイメージによって、見る者に『槍』だと認識させていたのだろう。

「……はあ……はあ……。な、情けないわよ……。あ、あんた達……!？」

姫騎士風のドレスアーマーに身を包んだ命の恩人は、巨大な馬上槍を杖のようにして身体を支え、肩で息をしながら現れた。目に見えて消耗しているが、それでも恰好つめようと虚勢を張っているのが彼女らしいとモカは思った。

「〈グングニル〉さん……!？」

そう。自称〈グングニル〉こと、キリエだ。

「……パイセン、もうへとへとじゃない。助けてもらってなんてんだけど、大丈夫なの?」

「は! 大丈夫に決まって――ごめん、無理……!」

リツの問いに、やはり虚勢を張ろうとして出来ず、キリエは両膝を地面に着いた。外傷こそないが、先の攻撃でかなりの機力を使ったのだろう。寸前でモカが支えなければ、そのまま倒れていたに違いない。

「ありがとうございます。助かりました」

「……別に――」

「――モカ……っ!？」

「あ……!？」

眼前に迫る影に気付き、モカは言葉をなくした。「ブレケース」はそこら中にいる。リツとキリエは満足に動けないのだから、すぐに二人を移動させるべきだったのだ。

後悔の念を抱きつつ、それでもモカは「リーピン」が凶器と呼ばれる所以である槌矛の

穂先を突き付け、抵抗する意志を示す。

眼前の〈ブレケース〉が彼方から飛来した三本の刃に穿たれたのは、次の瞬間だった。見上げると、頭上を旋回する飛行型〈機獣少女〉の姿があった。先ほどの攻撃は彼女によるものだろう。こちらの視線に気付いたのか、羽根を上下に振って応えてくれている。

一人ではないらしく、忙しなく低空を飛び回り、地上の〈ブレケース〉を牽制している別の飛行型〈機獣少女〉が見えた。

「……………」

「こうも続けて九死に一生を得るのは、運が良いと思っていいるのだろうか。本当に幸運なら、そもそも危険な目に遭わないはずなのだから。」

『「この一帯の〈機獣少女〉へ通達。〈ブレケース〉の弱体化と、新たな増援がない事を確認している。自身と味方の生存を第一に、今しばらく奮闘する事を願う。繰り返す——』

通信は、すべてのMBデバイスが受信するように割り当てられた、緊急回線からだった。タイミングから考えて、発信しているのは頭上を旋回している彼女だろう。

「この通信、本当でしょうか？」

「そうじゃない？ 言われてみれば、確かに途中から〈ブレケース〉の動きが鈍っていた気がする。ねえ、パイセン」

「……………そうね。気付いてたわよ、ええ」

モカに肩を借りて立ち上がりつつ、キリエはリツの問いに対し、当然といった風を装っていたが、恐らくは気付いていなかったに違いない。

「とりあえず一度、後退しましょう。リツ先輩、歩けそうですか？」

「なんとかね。モカは残念なパイセンにそのまま肩を貸してあげて」

「誰が残念よ……………」

抗議の声を上げるキリエに苦笑しつつ、周辺を警戒する。通達の効果か、〈機獣少女〉の士気が上がったらしく、流れが変わったようにモカは感じた。



オオミヤ・シテイの地下シェルター。

ロゼットは人心地つき、伸びをして身体を解していた。

タオエンから〈ブレケース〉が弱体化したと連絡を受け、小型端末による情報収集で移動中の群れの様子も確認した。その結果をたった今、ヴィオレに伝えたばかりだ。飛行型

〈機獣少女〉の速さなら、すぐに情報は伝わるだろう。

「あとは〈ルイン〉か……」

世界中から東方大陸を目指し集まっていた〈ブレケース〉の群れは、その多くが姿を消した。少なくとも、ネットワーク上の目撃報告は、更新がぱたりと止んでいる。タオエンが言うには、〈ブレケース〉の出現には〈シエネレーター〉が関わっており、その対処をやみひめ達が行うらしい。大量に出現した〈ブレケース〉の多くが姿を消したのなら、彼女等が対処に成功したのだろう。残っているものを殲滅するだけなら、希望はある。

もつとも、最大の脅威は未だ健在なのだが、それについてもタオエンは考えがあるらしい。別の星から来た異邦人だとは知っているが、彼女はいったい何者なのだろうか。

「ふふ……」

シエルター内の一角に、子供達が集まっている。相手をしているのは避難民を護衛し、そのまま残った〈機獣少女〉達だった。その中にはカナコと同僚のミスキ・オイカワや、『二つ名』持ちの〈獣王〉アйна・ボーグマンと〈竜帝〉ルイゼ・リンシユテッドもいた。〈機獣少女〉の存在は珍しいものではないが、実際に会う機会是一般人であればなかなかないだろう。

微笑ましい光景に、ロゼットは自然と笑みを零した。

「——良いものだな」

すぐ隣から声が聞こえた。落ち着いた、ロゼットには聞き馴染んだ声だ。

重傷を負い、恐るべき回復力で外傷は治ったものの、ずっと眠り続けていたアニスが目を開けていた。上半身を起こし、ビニールシートに座るロゼットと同じ視点で、同じ光景を見て、同じ感想を述べている。

「アニス……!!」

「がんばったな——アリーシャ」

そう言つてアニスは、ロゼットの頭にぼんと手を置いた。母親が幼子にするように。

アリーシャ・グレイシア。

それがロゼットの本当の名前だ。

「……その名前と呼ばれるの、久しぶりだね。本名なのに、ちょっと違和感があるよ」

『ロゼット・コダール』を襲名してからは、本名で呼ばれる機会が減多になかったため、致し方ない。

（がんばった——か……）

褒められたくてがんばった訳ではない。立場と状況から、そうせざるをえなかっただけ

の事。それでもアニスの一言を聞き、報われたような気がしたのは、本当は褒めてもらいたかったのかもしれない。

「はい」

「なんだ、これは」

「がんばったご褒美だよ。私も貰っちゃったから」

「——?」

渡された個別包装の飴を見つめ、アニスは不思議そうな表情を浮かべていた。



「——さて、次の段階に進もうかの」

〈ジエネレーター〉のコア——その代表者の説得に成功し、アニスが仮想空間から退室した直後の事だ。入れ替わるように現れたサクヤヒメは、さも当然といった様子で、そう言った。

『……………』

やみひめもツバキも言葉が出ない。

サクヤヒメはハイデマリーの救出を拒み、最後まで人間を滅ぼすと言って聞かなかった。そして、変質した〈ヘルイン〉によって背後から貫かれ、カナコによって救出された。それから何処に運ばれ、彼女に何があったのかは知らないが、現実の時間では一時間も経過していないはずなのだ。それにも関わらず、こんな何事もなかったような態度を取られれば、戸惑って然るべきだろう。

「……………なんじや。妾が厚顔無恥を承知で何事もなかった風を装っておるのじやから、主等も空気を読まぬか」

それはつまり、これまでの事は水に流せという事か。

「ハイデマリーを助けるのに協力してくれる——っていう事でいいの?」

「そうじや」

「心変わりには〈ヘルイン〉の変質が原因ですか?」

「そうじや。これで満足かの」

やみひめとツバキの問いに答えるサクヤヒメに、悪びれた様子は一切ない。太々しいと云え言える。

「そんな訳がなからう。少なくとも貴様のそれは、ものを頼む態度ではないな」

「勘違いも甚だしいの。妾は協力してやろうと言っておるのじや。頼んでいるつもりな

どない」

カグツチとサクヤヒメの間に一触即発の空気が流れる。アニスがいない今、二人を仲介してくれそうな者はなく、やみひめとツバキが間に入ろうとした時――

「――とはいえ、ここは〈アニマウルペス〉の顔を立ててやるかの」

「……なに？」

「頼む。妾に手を貸してほしい」

口調は変わらず、頭を下げた訳でもない。だが、サクヤヒメが最大限譲歩したのである。事は雰囲気から伝わってくる。

「……………ふん」

カグツチも同様なのだろう。納得した様子はないが、もう突つかかるつもりもないようだった。

「ひよっとして、アニスさんとなにか……？」

カグツチもそう呼んでいたが、サクヤヒメが口にした〈アニマウルペス〉とは、アニスの本来の名前なのだろう。

「そういう事じゃ」

〈ヒナミ総力戦〉で顔を合わせた際、二人には面識があった。タイミングから考えて、予めアニスがサクヤヒメと接触し、お膳立てをしてくれていたのだろう。機獣同士であれば仮想空間を使って連絡を取る事が出来る。

「では、ツバキとはこれから別行動だな」

「え――？」

「どういう事ですか……？」

カグツチの言葉に、やみひめとツバキは疑問符を浮かべた。



〈ヤミヒメ〉の操縦席。

アサトはただ席に座り、〈ルイン〉とカナコ達の様子を遠目に見守っていた。

「……………」

此処からではコア・ルームに入ったやみひめとツバキの状況は判らず、かといってカナコ達を援護する訳にもいかず、完全なる手持無沙汰だ。姿を隠し、〈ルイン〉の状況も把握出来る場所を選んだが、見ているだけというのはつらい。特にカナコの窮地には肝を冷やした。結果的に彼女は助かり、その左腕から世界を照らすような眩い光を放った。そ

それは操縦席のアサトにも届き、無意識に感じていた、何者かの悪意のようなものを霧散させた。

そして今、〈ルイン〉は虚空から生えた巨大な鉄を備えた二本の腕に串刺しにされ、先端に砲身が付いた尻尾を眼前に突きつけられている。アサトは直に見ていないが、それらは映像で見た巨大な蠍型の古代種〈ステインガー〉のものと同じだ。

現在、戦闘は停止し、カナコ達は拘束された〈ルイン〉を監視しているような状況だった。

「……俺、此処にいる意味あるのか？」

「搭乗者がいなければ、機獣は真価を発揮出来ません」

アサトが呟くと、後部座席の紅桜が答えた。

「機獣は人間を感じ、そこに無限の可能性が生まれるとされています」

誰かの受け売りなのだろう。常に淡々とした口調だが、紅桜の言葉には実感がこもっていなかった。ひよつとしたらアサトに気を遣っての発言だったのだろうか。

「なんですか？」

振り返ってみるが、眼鏡越しのためもあり、表情から紅桜の真意は読み取れなかった。

「いや、なんでもない」

正面に向き直り、コア・ルームに入った一人の事を考える。そういえばツバキは足を怪我していたが、大丈夫なのだろうか。

そんな事を思ったためか、アサトはツバキの幻覚を見た。

見た目は普通の小学生なのだが、その精神と性格は恐ろしく大人びており、実はロリ巨乳というアンバランスで背徳的な要素を備えた少女。

普段は可愛い顔に済ました表情を浮かべているが、今は状況を理解出来ないかのように、きよとんとしている。その差異が可愛い。小柄なため軽いが、確かに存在しているのだと主張する適度な重みと、体温の温かさを感じる。

幻覚ならありえないはずだが、さて――

「……ふえ!? た、橘さん!？」

幻覚のはずのツバキが、我に返った様子で言った。

否。幻覚ではなかった。広いとは言えない操縦席で、アサトの膝の上に乘っているのは、紛れもなくツバキ本人だった。

「ツバキ……?」

コア・ルームに入ったはずのツバキが、どうやって操縦席に、しかも突然現れたのか。彼女も戸惑っているようで、その取り乱ししようが尋常でなかったため、アサトは却つ

て冷静でいられた。といつても、少し前には叶かなわなかった——別にしたかった訳ではない、断じて——お姫様抱っこのような体勢になり、密着し、顔も近いたため、やはり内心では穏やかでいられなかったが。



静止した時の中で永遠に眠り続ける。

何度、世界が創り変えられようと。

どれだけ、やり直されようと。

干渉することなく。

拒こはむこともなく。

何度でも何度でも。

願あう者が在る限り。

彼女はただ、応え続ける。

納得のいく世界になるまで。

何度でも何度でも。

それまですつと眠り続ける。

今回もきつと——

あとがき

どうも、流遠亜沙るとおあさです。

『ゾイヤミ』第四十六話をお届け致します。

本当に書くのが大変で、早くこの地獄から解放されたいと、ここ数ヶ月は割りとマジで感じています。

完結まであと少し……。

良きところで謝辞を。

まずはいつもの紙白さんに感謝を。アニスが復活です。そして本作におけるロゼットの本名が明かされました。命名は紙白さんです。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に一応、感謝を。コメントなしで構わないと書いても、アンケートが相変わらず戴けません。知ってる読者さんしかいないのかも、本気で思うようになりました。

趣味で書いているものなので、本当にしんどいならやめればいい。

なんか恨み節っぽくて申し訳ありませんが、本気でやめようかと考えています。

もし、『あなた』がサイレント読者で、続きが読みたいと思ってくださっているのであれば、アンケートで「読んでるよ！」と主張してください。

コメントなしなら一分もかからない作業です。

2020 / 11 / 27 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女インカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第3部』小説ページに戻る